



わたしの聖戦^{ジハド} 女性が働くこと

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

(136)

異国からの客人

縁あつて、知人のそのまた知人に当たるロシアからのお客様を、1日エスコートする機会があつた。彼は、気ままな独身貴族。冬の休日を利用して、単身で日本にやつてきた。ほとんど日本ははじめてで、何もかもが珍しいらしく、好奇心旺盛な質問を次から次に浴びせてくる。

「なんのために多くの人がマスクをしているのが？」

「タクシードライバーが手袋をはめているのはどうして？」

「遅い列車に小学生が乗っているのは何故？」

「早い新幹線と遅い新幹線はどう違うの？」(の

ぞみとこだまのことです)」

ロシア語ではなく、英語でのコミュニケーションといえども、普段英語を使うことのない私にとってこれらの質問に答えるのは決して簡単なことではない。耳をダンボにし、持ちうる限りの、思いつく限りの英単語をしどろもどろ口にし、説明になつていないので、自分が欲しからなものだと思う。歳を取るほどに失われてしまう「はじめ」が、いじめて」が、いかに刺激に満ち、生きている実感を与えてくれることか。



そうだ、私もはじめて海外へ行つたときは目に映るものすべてが珍しく、「これ、何?」とか「なぜこうなつているの」と感じたものだ。入国審査が怖くてしかたなかつたことやぬるいビールに辟易したことや

いい国だ。安全だし、便利である。何より生まれ育つた国なのだから、身もこころも馴染んで当たり前。わざわざ、治安が悪く不便で時差もある遠い国へ出かける必要はない。それでも、私を含めて多くの人々は、ときには、おそらくそれまで、みたくなる。

まだほどの、普通に、歳を重ねてきた私にとって、ロシアからの客人が見せる好奇心や驚きこそが、忘れかけていた新鮮な気持ちを蘇らせるきっかけになつた。

別れ際、彼が「僕は、実は某国の某諜報機関で働いているんだ」とそつと教えてくれた。ん、さもありなん。わが立ち居振舞いを振り返り、ボンドガールとしてははなはだ力不足であつたと反省することしきりである。

本当に、人生何が起ころかわからない。だからこそ、生きるつて素晴らしいのだとしみじみ思い、颯爽と飛び立つ彼を見送った。

レジでお金を出すときにモタモタしたこと。戸惑つたり恥ずかしい思いをしたことは数限りがない。それでも異国的魅力に逆らえず、帰国したらまたすぐにどこかへ行きたくなつた。

日本は確かに居心地の

苦八苦し、あげく自分の英語力の至らなさを思い知らされた。それでも、はじめて食べるラーメンやたこ焼きをおいしそうに平らげ、改札口で恐る恐るICカードを使う様子に、思わず頬が緩んだ。

イラスト・伊藤栄章